



全国梅サミット

熱海市長 齊藤 栄

先日、第28回全国梅サミットを熱海市で開催しました。梅を共通の資源とする13市町が参加し、2日間にわたり首長会議、記念講演、梅を使った特産品の市民向け抽選会、熱海梅園の視察、記念植樹などを行いました。

全国梅サミットを前回は熱海市で開催したのは14年前の平成21年です。私が市長に就任して3年目、梅園の全面改修の真最中でした。「財政危機宣言」を出す大変厳しい市の財政状況下で、故大塚実氏の多大なご寄付と提案によって進めたものです。

樹木医の和田博幸氏が行った記念講演でとても興味深い話を聞きました。和田氏は熱海の梅、あたま桜、ジャカランダを大塚氏のもとで整備した方ですが、常に難易度の高い指示があり、四苦八苦したそうです。梅園改修では、梅以外の樹木を可能な限り伐採すること、また白梅と紅梅の比率を7対3にすることなどを強く求められたとのこと。樹木の伐採には当時地元理解を得るのに苦労したものの、今では梅園内に明るい陽が差し、梅の色合いのバランスも美しく、実に先見性のある英断であったと言っています。

梅園改修の後、糸川のあたま桜の整備も進め、「日本一早咲きの梅と桜」を全国にアピールできるようになり、熱海復活の大きな契機となったことは周知の通りです。

今回の全国梅サミットは、梅園の整備の歴史を振り返る大変良い機会でした。引き続き、梅園をはじめとする熱海の宝を磨き続けてまいります。



新たな観光市場の開拓

熱海市長 齊藤 栄

先日、令和4年の宿泊客数を229万人と発表しました。この数字はコロナ禍前の約7割に当たり、かなり戻ってきたものの、全国旅行支援などの手厚い助成があったうえでの数字であることを考えると厳しい数字です。コロナが終息しても、生活様式の変化により、コロナ禍前の経済活動規模には戻らないと言われており、年間宿泊客数300万人には容易には戻らないと考えるべきでしょう。

現在、熱海は週末や繁忙期には熱海駅周辺を中心に交通渋滞が生じるほど観光客が訪れていますが、平日の宿泊施設にまだまだ空きがあります。宿泊客数をコロナ禍前に戻し、そしてさらに伸ばすためには平日利用を促す施策が必須です。そのターゲットとして考えているのがビジネス利用のお客様です。例えば、新しい企画を練るための会議を都内の会議室ではなく、熱海の豊かな自然のなかで行うことで、新たなアイデアが生まれやすくなることが期待できます。また、熱海の地域資源を生かした社員研修も考えられます。

これまで3年をかけて、ビジネス客のためのワーケーション施設の整備を支援してきました。今後は、これらの施設の活用促進とともに、研修プログラムやアクティビティ開発などのソフト面の整備を進めていきます。

平日のビジネス利用促進は、新たな観光市場の開拓として、腰を据えて中長期で進める施策です。「会議をやるなら熱海で！」が当たり前となることを目標に進めてまいります。

市長メッセージ

170



令和5年度がスタートしました！

熱海市長 齊藤 栄

新年度は、コロナ禍からの経済再生や熱海の持続的発展を目指した各種施策を講じながら、伊豆山土石流災害からの復旧・復興を市の最重要課題として取り組む一年となります。

特に、現在立入禁止となっている「警戒区域」を解除して、希望される方の帰還を開始することが大きな目標です。国による逢初川の新設砂防堰堤(ダム)はすでに完成し、現在、静岡県による源頭部周辺の不安定土砂の撤去が進んでいます。この作業が予定通り進むことを前提として、夏の終わりまでに警戒区域を解除することを目指しています。

同時に、被災者の皆様の生活再建支援、そして復興まちづくり計画に基づく復興事業についても着実に進めていきます。

生活再建に向けては、引越し、住宅の再建や補修など様々なことを行っていかなければなりません。このため、市役所内に総合窓口としての「被災者支援室」を設置し、被災者お一人おひとりに丁寧に対応してまいります。

復興事業を進めていくうえで、国や静岡県との密接な連携が今後益々重要になってきます。新年度に、国(国土交通省)から職員を招き、復興事業の担当部長を担ってもらうことにしました。新部長には国とのパイプ役、そして静岡県との調整役として活躍してもらおうことを期待しています。

新年度は、組織の体制を強化し、市役所が一丸となって、伊豆山の復旧・復興をはじめとする市政の課題に取り組んでまいります。

市長又ツセージ

171



警戒区域の解除

熱海市長 齊藤 栄

4月の中旬、伊豆山土石流災害の被災者の皆様を対象に説明会を開きました。法律に基づいて、立入り禁止としていた警戒区域の解除が大きなテーマです。

この3月に国の直轄事業による砂防ダムが完成し、5月末には静岡県による源頭部の不安定土砂の撤去が見込まれることから、本年9月1日を警戒区域の解除予定日として設定しました。これにより、9月から、被災地域への帰還が可能になります。

しかしながら、警戒区域が解除になっても、帰還を望まれるすべての方がすぐに帰れるわけではありません。居住するには、電気、ガス、上下水道といったライフラインの整備が必要ですが、修繕をすれば戻ることのできる家のライフライン整備率は、9月1日で約7割にとどまります。また、住むために必要な自宅の補修などを各自で行っていたいただく必要があります。

市は、被災者の皆様のさまざまな声を踏まえ、生活再建を後押しするための各種の支援策を用意いたしました。例えば、引越しや自宅の修繕などで発生する費用の助成や、住宅再建のための借り入れに対する利子助成などです。

4月から、総合窓口として「被災者支援室」を新たに設けました。一日も早く、ひとりでも多くの皆様に住み慣れた伊豆山の地へ戻っていただけるように、あるいは、新たな生活がスタートできるように、市は全力を挙げて取り組んでまいります。



丹那トンネル慰霊100周年

熱海市長 齊藤 栄

先日、丹那神社奉賛会主催による丹那トンネル慰霊100周年事業としての講演会が芸妓見番で開催されました。元国鉄職員で地質工学専門の大島洋志氏が「私が丹那隧道だんがとんずから学んだこと」と題して技術的な考察を、また、古屋旅館会長で熱海商工会議所会頭の内田進氏が「熱海への道程」と題して、熱海の交通機関の発達の経緯などを講演しました。

ご存じのように、丹那トンネルの開通によって、元々地の利がそれほど良くなかった熱海が大きく発展して現在に至っています。しかしながら、その仕事は大変な難工事であり、多量の湧水や断層などによって完成までに大正7年から昭和9年までの16年を費やすとともに、大正10年4月の大崩落を含めて67名の工事関係者が犠牲となっています。

実は、丹那トンネルが開通する前の東海道線は、御殿場経由の山越えで高低差が大きく、輸送力の増強が難しい状況でした。このため、東海道線の輸送力増強と言う大目標を果たすため、それまでの御殿場経由から高低差の少ない熱海経由に変更となりました。結果として、国力向上を目指した国策である丹那トンネル建設の恩恵を、熱海は大きく受けることになったわけです。

今回の講演会で改めて丹那トンネルの歴史と意味づけを俯瞰ふかんすることで、現在の熱海の発展が先人達の偉業と犠牲のうえに成り立っていること、また、熱海が非常に強い運を持っていることを強く感じました。



お祭りが再開します！

熱海市長 齊藤 栄

新型コロナウイルス感染症の影響で、この3年以上の間、さまざまな行動制限がありました。しかし、5月8日を区切りに、この感染症の法的な位置づけが変わり、神社などによる地域のお祭りや関連行事も元の姿に戻りつつあります。

このことは、特に観光地である熱海市にとつて大きなことです。なぜなら、地域に根差したお祭りの開催は、多くの観光客を地元呼び込み、大きな経済効果をもたらすからです。これは熱海を含む伊豆半島、そして全国的にも言えることです。

また、お祭りの大切な役割に、地域の伝統・文化の継承があります。昔から脈々と引き継がれた踊りやお囃子は、その地域のアイデンティティそのものです。お祭りの開催が長い間中止になったりすれば、それらが引き継がれず、再開しようにもできない状況になってしまう可能性があります。

さらに、お祭りは地域をひとつにする重要な行事でもあります。人と人とのつながりが希薄になり、地域コミュニティが崩壊しつつあると言われている昨今ですが、子供から高齢者まで幅広い年代の人々が力を合わせて、地元への愛着と誇りを再認識する大切な機会になっていると考えます。

七月は来宮神社のこがし祭りをはじめ、南熱海・網代・初島で夏祭りが賑やかに行われます。新型コロナ対策には引き続きご留意いただきながら、お祭りを大いに楽しんでいただきたいと思えます。



広がる紙資源のリサイクル

熱海市長 齊藤 栄

産官民連携による紙資源リサイクルをテーマとした首長座談会が行われ、富士市長と神奈川県奈川県の座間市長の3人で対談しました。

私は熱海市が13年前から始めている雑がみ回収の取り組みについて説明しました。ごみ処理の有料化がきっかけで旅館組合が雑がみ回収の取り組みを始め、その後、女性市民団体、地元企業、町内会、市内小中学校、福祉施設などが参加し、現在年間約100トンの雑がみが回収され、トイレットペーパーになつて戻ってきていること。一般市民にも広く参加してもらうために、市役所のロビーなどの行政施設に回収ボックスを設置していること。また、「雑がみって何？」から始まり、なぜ雑がみ回収が大事なのかを、実際に自分が自宅で回収している雑がみを見せながら、小中学校などを訪問して行っている環境教育の重要性についてもお話しました。

一方、富士市長は紙資源のリサイクルを含むSDGsを進めるためのプラットフォームづくりについて、座間市長はショッピングモールのフードコートの紙ごみリサイクル事業について、それぞれのまちの特性を踏まえ、た取り組みを発表されました。

今回の座談会は、熱海の取り組みを外から見る良い機会となりました。そして、改めて熱海市は「観光」と「環境」の両立したまちを目指さなくてはならないとの思いを強くしました。今後は観光客の皆様にもご協力いただき、更に紙資源のリサイクルを前に進めていきたいと考えております。



夏休みの海外体験

熱海市長 齊藤 栄

熱海市では市内中学生を対象に、夏休みを使って海外研修事業を行っています。今年はコロナで4年ぶりの実施となり、先日その帰国報告会がありました。行先はイギリス（泉中、多賀中）とオーストラリア（熱海中）で、参加者は3人とも女子生徒でした。

イギリスは9日間、オーストラリアは16日間と限られた時間ではありましたが、食事や文化、そして習慣の違いなど感じたことを元気に話してくれました。特に印象的だったのは、「最終日にホストファミリーのお父さんしか見送りをしてくれませんでした。外国人人は自分の生活が優先で文化の違いを感じました。」との言葉です。今回の研修は中学生の3人にとって視野を広げる貴重な体験だったと思います。そして海外の体験はその人の人生を大きく変える可能性もあります。

私の初めての海外体験は大学3年の夏休みに行ったチェコスロバキアの建設公社での研修でした。40人程のヨーロッパの学生たちと寮生活をしたのですが、当時社会主義国であったチェコスロバキアの国の仕組みに大きなカルチャーショックを受けました。また、その後、同国の民主化による変革を目の当たりにする機会を得たことから、「社会は変えられる」という強い確信を持つようになりました。

若い時の体験は鮮烈であり、その人の可能性を大きく広げるものです。これからもこの海外研修事業をはじめ、熱海の子供たちが多様な経験を積めるよう努めてまいります。

市長又ツゼーシ

176



大躍進！熱海富士

熱海市長 齊藤 栄

熱海富士が大相撲の9月場所で優勝を争うという快挙を成し遂げました。惜しくも優勝は逃しましたが、敢闘賞を受賞されました。

熱海富士は弱冠21歳。初土俵からわずか3年ですが、その成長ぶりには目を見張るものがあります。特にこの9月場所では、再入幕を果たしたばかりにもかかわらず、力強い相撲で勝ち星を重ねました。体もひと回り大きくなったようで、取り組みを通して、どんどん強くなっていったような気がします。恵まれた体格を持っているうえに、なにしろ稽古熱心。厳しい稽古を重ね、ひたむきに相撲に取り組んできた結果です。

優勝決定戦の当日、熱海富士後援会がパブリックビューイングを開催してくれました。会場となった福祉センターで、私も揃いのTシャツで「熱海富士」と書かれたタオルを振って応援しました。会場には入りきれないほどの約120人が集まり、その熱気たるや大変なもので、全員が「熱海富士の優勝」を願って心をひとつにしました。会場以外でも、多くの市民の皆さんがテレビの前で祈るような気持ちで応援したと思います。まさにオール熱海での応援です。

熱海に多くの元気と感動をもたらしたこの9月場所で、熱海富士の名前は全国に知れ渡りました。これからも強い力士を目指して精進を重ね、益々活躍してくれるよう、心から応援しています！



会議をするなら熱海で！

熱海市長 齊藤 栄

先日、熱海市は株式会社JTBと連携協定を結びました。その協定の大きな目的は、熱海におけるビジネス利用の促進です。

なぜこの協定が必要なのか。現在、熱海の来遊客はコロナ禍を経て戻りつつありますが、人口減少が進む中、個人観光客を対象とした誘客だけでは、近い将来厳しい状況になることが予想されるからです。

観光地熱海の一年は、忙しい時とそうでない時の差が大きくあります。これは個人客の休みに連動するためで、具体的には3月と8月以外は宿泊施設にかなり余剰があります。

この閑散期に、ビジネス利用を目的にした新たな顧客を開拓していきたいと考えています。

熱海は歴史的にも重要な会議が行われてきました。明治時代に伊藤博文や大隈重信が国会の開設など日本の将来を熱海で議論し、昭和の時代には松下幸之助氏が松下電器産業（現パナソニック）の再起をかけた会議を熱海で行っています。これは都心から近いといったアクセスの良さに加え、豊かで美しい自然環境、そして何より温泉が創造力を刺激する非日常空間を作り出しているからでしょう。

もちろん、新たな顧客の創造は容易なことではありません。しかしながら、熱海におけるビジネス利用の促進は、中長期の視点で取り組むべき重要施策の一つです。経営会議や知恵出しの開発会議、社員研修や学会、商談など、「ビジネスシーンで使える観光地といえば熱海！」ということが常識となるよう取り組んでまいります。



この一年を振り返って

熱海市長 齊藤 栄

今年も年末が近づいてきました。今年にはコロナの影響は限定的で、観光地としては総じて賑わいのあった1年だったと思います。その中で幾つか特筆すべきことがあります。

まず一つは、スポーツの分野で熱海の若手が活躍したことです。熱海富士関においては、大相撲秋場所と九州場所でも2場所連続の優勝争いを演じ、「熱海富士」の名前を全国にとどろかせました。また、泉小中学校出身で駒澤大学陸上部主将の鈴木芽吹選手の活躍も目覚ましく、2年連続の大学3大駅伝3冠という偉業に王手をかけるまでになりました。熱海富士関と鈴木選手の2人の若者の活躍は熱海市民を大いに元気づけました。

もう一つは、今年の9月1日に伊豆山土石流災害による立入禁止区域が解除され、被災者の皆様の帰還が始まったことです。上流に残っていた不安定土砂の撤去が静岡県県の行政代執行によって完了し、安全性が確保されたことを受けたものです。これまでに、ライフラインが復旧し、家屋の修繕などが整った約10世帯が住み慣れた元の住居に戻ることができました。今後引き続き、帰還がスムーズに進むよう、行政として支援していきます。また、これまで河川や道路などの整備についてのご理解やご協力を得るため、静岡県と共に地区別での説明会を開催してまいりましたが、復興事業が前に進むよう引き続き努力してまいります。

皆様にとって、今年はどうな年だったでしょうか。来年が更に良い年になりますように。